



## 後腹膜の肉腫

(こうぶくまのにくしゅ)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

### 後腹膜肉腫について

肉腫（サルコーマ）は一般的に、筋肉、脂肪、骨や神経といった組織を発生母地に行っているため、手や足に発症する頻度が多い疾患です。しかし、腹腔にある臓器やその周囲にも、筋肉や脂肪などの組織は存在するので、まれではありますが、そこに肉腫が発生することもあります。後腹膜とは解剖学的な用語で、身体において腹膜の外側のことを指します。一般的に胃や腸のほとんどは腹膜という膜に包まれて腹腔内に存在します。それ以外の腎臓・尿管・膀胱といった尿路や、大動脈・大静脈といった大血管は、腹膜の外側、主として背中側に位置し、後腹膜臓器として扱われます。「後腹膜肉腫」という名称は、病気の種類をあらわした名前というより、あくまでも後腹膜に発生した肉腫を指す総称です。どこに腫瘍が発生したかということは、特に外科治療の際には大切な問題ですが、それ以上に病気の全体像を捉えるために大切な事項は、どんな種類（発生母地、悪性の度合いなど）の腫瘍であるのかです。

### 症状について

初期では特にめだつた症状はありません。多くの患者さんが、腹部が大きくなってきたとの訴えや、検診で発見され医療機関を訪れています。腫瘍が大きくなるにつれて内臓を圧迫しますので、それにともなつた腹痛や吐き気などを引き起こします。

### 診断について

腫瘍が存在すること自体は、画像検査（CTやMRIなど）で診断が可能です。しかし、治療方針を決めるために大切な情報は、画像診断のみでは不十分なことも少なくありません。そうした場合には、治療に先んじて腫瘍の生検（腫瘍組織の一部を針などによって採取する処置）を行ない、病理検査（腫瘍細胞を顕微鏡で詳しく調べる検査）を行うことで、腫瘍の診断を行います。

### 治療について

後腹膜肉腫が初期の段階では、症状があまり出現しないことが多いため、腫瘍が小さいうちに発見されることはあまりありません。ほとんどの方がはじめて診断される場合に大きな腫瘍として見つかります。よって、どこの診療科に治療の相談をしたらよいのか不明な場合が多くあります。一般的に転移を伴わない後腹膜肉腫についての外科治療を行っています。特に はじめて発見された転移のない後腹膜腫瘍の治療は、まず外科切除が可能かどうかを検討することから始まります。腫瘍が再発した場合や転移をきたしている場合は、手術が有効であるかどうかは状況によって異なります。薬物療法や放射線治療といった他の治療方法を担当する医師と相談のうえで、治療の計画を立てていく必要があります。

